

「主の晩餐」

2014年11月22日

マルコによる福音書 14章 22節～26節。 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきりしておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた。

「過越の食事」をしていた時、主イエスはあなた方の内の一人が私を裏切ろうとしている、一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだと言われた。食卓は、誰が裏切るのかと緊張感が走り、多くの弟子たちは自分の主イエスへの愛を信じてもらえないことに心を痛めた。その後、主イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、弟子たちに与えて「取りなさい。これはわたしの体である」と言われた。また、ぶどう酒の杯を取り、感謝の祈りを唱え、「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」と言われた。この時、弟子たちは主イエスの言葉の意味を全く理解できなかったであろう。十字架と復活、そして聖霊降臨を体験した後、彼らはこの言葉を思い出し、真意を受け止めることができた。

主イエスは、パンと杯を分け与えることによって、旧約聖書のエレミヤの預言の成就を表された。エレミヤは国家の滅亡を前にした乱れきった世相を直視した。そこでは、律法を守って生きることなど期待できない荒んだ地獄のような状況であった。モーセを通して与えられた律法を遵守すると約束して結んだ古い契約は全く破綻している。エレミヤは底知れぬ深い罪の実態を見て、人間に絶望した。そこから、エレミヤは神によって立てられる「新しい契約」を仰ぎ、望んだ。それが、エレミヤ書 31章 33節～34節の御言葉である。

「しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし『主を知れ』と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。」文字として目の前に示される律法ではなく、胸の中に授け、心に記される。神は我らの神であり、我らは神の民となり、神と人が一つに結ばれ、神を知り、信じなさいと言う必要がなくなる。それは、神が悪を赦し、罪に心を留めることがないからである。エレミヤは、一方的な赦しが宣言される「新しい契約」が立てられることによってしか、人間の救いはないと信じ、この預言を絶望の中から血を吐くように望んで語った。

主イエスは、エレミヤが望んだ「新しい契約」は私が受ける十字架によって罪の赦しが実現、成就すると示された。これを記念するように、十字架で裂く私の体であるパン、流される私の血であるぶどう酒を受けなさいと言って与えられた。キリスト教信仰は人間の罪の一切を問わず、無償で赦される十字架に焦点を置く。赦しとは、罪にありながらも、神はそれを心に留めず、和解が与えられ「インマヌエル・神は我々と共におられる」恵みをいただくことである。この恵みが神に根拠を持つ私のアイデンティティであり、ここから、私の新しい人生が始まる。